

被災地支援レポート

東日本大震災 支援に携わって

3月11日に発生した、東日本大震災から早くも4か月が経過しようとしています。現在も被災地は、多くの住民が避難所生活を余儀なくされ、瓦礫の山に覆われています。今回、鹿児島県を代表して本町から、保健センターの平山里佐子保健師が被災者支援のため宮城県女川町へ派遣されました。平山保健師が被災者支援を終えて提出したレポートを掲載します。



去る、5月31日〜6月6日までの1週間、私は、知名町を代表し、鹿児島県チームの一員として、宮城県女川町に東日本震災後の被災者支援として派遣されました。女川町に入ると、目に映るすべての光景に衝撃を受け、未曾有の大災害による現実を目の当たりにしました。女川町は、人

口9,965人で漁業の盛んな町であり、また東北電力の女川原子力発電所があり、財政的にも豊かな町でしたが、今回



建物の3階部分に打ち上げられた車

の東日本大震災で町は壊滅的な被害を受けました。死者・行方不明者をあわせて1,034人。一瞬のうちに、人口の約1割の方が亡くなり、町の約8割の土地や建物が津波被害に遭いました。生存者のうち、町内に残ったのは約4,200人。そのうち、避難所や仮設住宅で生活されている方が約1,700人。残りの約2,500人がなんとか自宅などでの生活ができています。現状でした。

私の派遣時期は震災から約2か月半がたっていました。避難所で生活する方々は未だ1,500人近くおられました。今回、鹿児島県としての支援活動内容は、避難住民の皆さんの精神的ショック・ストレスからの心身の健康を確保するために、避難所などでの相談を実施し、心のケア活動をするものでした。14か所の避難所と仮設住宅を巡回し相談を行いました。また鹿児島県から精神科の医師が同行したこともあり、必要な方は診療を受けていただきました。多くの方が「眠れない」「思い出してこわくなる」「また地震・津波がくるのではと不安になる」「亡くした家族を思い出してやりきれない」と心のうちを語られました。津波で亡くした妻・両親・子供の写真を周囲に置き泣きながら眠る方、ガレキの中から探し出したぼろぼろの写真をなでる方、その姿に涙しました。その方々の心に寄り添うことができるのだろうかと思ひながらの支援となりました。

今回の震災は、被害があまりにも大きく、宮城県や県内の市町村だけでの対応は不可能です。そのため、各都道府県や全国各地の市町村が被災地支援に携わっています。女川町でも、鹿児島県以外に、石川県・山形県・徳島県・滋賀県の方々と一緒に業務分担し、被災者や被災地の復興のサポート体制を構築して行きました。1週間の支援で自分に何ができるのか、何をしたらいいのか不安の中での被災地入りでしたが、とにかく鹿児島県の支援というレールをしっかりとつなぎ、復興のための電車を走らせ続けることが、皆さんの支援者がかかわる状況の中で



被災者宅への訪問

私ができることだと感じながらの業務でした。被災者の悲しさ・つらさを感じるとともに、復興に頑張る被災地・被災者の方々のパワーも感じることができた1週間でした。被災者の方が、高台の避難所からみえる海を見ながら私

に「きれいな所でしょう。本当にきれいな町だったんだよ。そしてきれいな海でしょう。何もなかったかのように海は静かなんだよねえ・・・」と遠い目をしながらつぶやきました。彼らの目に映る、女川海・廃墟の様な女川の町並みのなかに、亡くした家族や、家、仕事、悲しい気持ちを感じながらも、復興のために頑張って生きていこうとする強さを感じました。

保健福祉課

保健師 平山 里佐子



鹿児島県からのスタッフ6名